

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(27) 平成13年7月15日

遠江国地誌シリーズ(その3)

『遠江風土歌』(S293/1)

『遠江風土歌』は明治6(1873)年に田中正福が著した浜松県(遠江国)の地誌です。著者の田中は愛知県土族で浜松県の役人でした。『遠江風土歌』は刊本であり、書名の由来は遠江国の地理や歴史などを、ほとんど七五調で書き記してあるからだと思われます。ちなみに廃藩置県により遠江国を管轄する浜松県が発足したのは明治4年11月のことです。明治9年8月21日には、ほぼ現在の県域の静岡県が誕生したので、浜松県があったのはほんの数年のこととなります。

『遠江風土歌』は浜松県が発足後、約2年経過して著されました。明治5年8月に学制が定められ、各府県も重点施策の一つに学校の設立を掲げ、全国に多数の小学校が設置されました。浜松県にも多数の小学校が誕生しましたが、場所や教員の確保の他、教科書の制作も大きな課題でした。そのころの教科書は大人向けの物や西洋の教科書を直訳したものなど、児童にとっては使いにくいものでした。『遠江風土歌』も浜松県下の小学校の副読本として採用されました。くずし字で書かれていますが、字は大きくて、ふりがなもふってあります。

『遠江風土歌』は、これ一冊熟読すれば当時の遠江国(浜松県)の様子がおおよそ理解できるようになっています。内容は遠江国の地勢から始まって、山河、駅や港、寺社、浜松県の組織、学区と学校、貧民扶助と病院、産物、租税、道徳と多岐に渡っています。また所々彩色された挿図もあります。

『遠江風土歌』の口絵には、見開きの遠江国の絵図があり、郡名と同時に一大区、二大区、三大区に色分けしてあります。これは明治5年に町村制を廃して大区、小区を置いたからです。当時の村数は1151ヵ村、人口は41万5千余と記されています。宿駅の項目では人力車は県内で600両もあったことがわかり、寺社の項目では、世相を反映して最近には檀家を離れる者が多いことが記され、官幣中社であった井伊谷宮の由来が絵とともに紹介されています。学区と学校の項目では、学区の区分けの説明や、教室で多くの児童が学んでいる絵などが描かれています。また産物の項目では綿、茶が最も有名であることも記されています。

『遠江風土歌』は明治7年3月には再版されており、広く使用されたことがうかがえます。この『遠江風土歌』は現在でも古文書解読の入門書として使われることがあるそうです。

【参考図書】

『静岡県史通史編5』(S209/3-3)

『浜松市史3』(S236/21)

『東海展望』(SZ00/23)

『静岡県教育史』(S372/40)